6/16/2009

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊

S. Ashina

オリエンテーション
序論　宗教と社会・政治・民族　4/14

Ⅰ　「政治的なもの」とキリスト教
　１　キリスト教社会主義と宗教社会主義　4/21
　２　「政治的なもの」―シュミット、アーレント、ムフ―　5/12
　３　国民国家とアナーキズム　5/19
　４　主権論とホモ・サケル―アガンベン―　5/26
　５　ティリッヒと意味の形而上学　6/2
　６　ティリッヒと宗教社会主義　6/9

Ⅱ　キリスト教思想と経済
　１　聖書の宗教と経済　6/16
　２　キリスト教と資本主義　6/23
　３　経済の神学と公共性　6/30
　４　経済と環境、あるいは政治の復権　7/7
Exkurs　キリスト教から見た東アジアの多様性―家族・死者儀礼―　4/28

Ⅲ　東アジアの近代化とキリスト教思想　10/6 ～

Ⅱ　キリスト教思想と経済

１　聖書の宗教と経済

（１）宗教と経済、問いの所在

１．「Ⅰ　「政治的なもの」とキリスト教」の議論より
　宗教と政治の関係をどこで問うのか？
　　ロゴス化以前の生の運動、欲望の次元から
　　↓
　　これは、宗教と経済の本質的な接点でもある。
　　宗教経済学

２．佐藤　光『市場社会のブラックホール――宗教経済学序説』東洋経済新報社。
　「エリアーデの「『未知のとき』に沈潜しようとする欲望」をあらためて、「宗教的欲望」と呼び、……消費や富や権力や地位などへの欲望のすべてを「世俗的欲望」と呼ぶことにしよう」
　　↓
　「偽装された宗教的欲望仮説」:「世俗的欲望の背後には無意識化された宗教的欲望が存在し、それが、さまざまな世俗的な姿を装いながら、前者の無限とも思える拡大化・肥大化・多様化のプロセスを促進している」（75）

Ｑ：宗教経済学的観点からヨハネ黙示録を解釈するとどうなるか。

田川建三『キリスト教思想への招待』

３．宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。

しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか

聖職者は、実質的に職業化しているのではないか

建前論を超えられない。宗教の抽象化。

現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など

４．四国遍路研究から

浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究――四国遍路の接待文化』古今書院、2008年。

「巡礼の空間的領域として、宗教的意味性に裏づけられた聖地（巡礼地）とそれらを単純につなぐ巡礼路（田中のいう基本的経路）を想定したモデルを、第 1 世代のものとすれば、田中がめざしたのは、そのような理念的な枠組みの外側にも目を向け、巡礼者の実際の行為から巡礼空間を立ち上げるものであった。すなわち彼が行ったのは、、宗教学に代表されるような理念的な巡礼空間モデルに対し、より実際的な第 2 世代モデルに提示にあったのである。これら 2 つのモデルはともに、点(point)と線(line)からなる構造をとる。その意味で、第 2 世代モデルは、聖地＝巡礼路モデルの発展系といえよう。それに対し、本稿では、「乞食圏」という面(space)的な領域を見出した」(214)

「巡礼のガイドブックが札所を如何に合理的に巡拝するかという視点から編まれているように、理念的には巡礼中に巡礼路をはずすことは通常の巡礼行動として想定されない……。したがって、本来は聖性を帯びた空間ではなく、巡礼とは無関係な日常世界の側に属する領域である。しかしながら、前提が宗教的動機であれ経済的動機であれ、巡礼行の実際において、地域社会から提供される接待に依存する巡礼者たちが実際に存在し、彼らは限界ある接待を十分に確保するために、巡礼路を踏む越えて外部へと向かっていった。その彼らの軌跡の集合体を概念化したものが「乞食圏」なのである」(215)

↓

「貧しさ」：宗教的あるいは経済的？

アッシジのフランチェスコ

レオナルド・ボフ(Leonardo Boff)

『アシジの貧者・解放の神学』エンデルレ書店。

宗教的な貧と経済的な貧困とを不可分に結合することの意義

豊かなキリスト教会・キリスト教世界において、キリスト教徒である可能性

心の貧しさと端的な貧しさ

（２）聖書の宗教と経済

４．トレルチの『社会教説』における「初期カトリシズム」の「商業」「奴隷制度」「慈善活動」の叙述を参照。

「キリスト教徒たちは、圧倒的に都市的な状況のなかで、すなわち貨幣経済の関係の下で生活していて、商業を廃棄しようと考えることは不可能であった。」（高野・帆苅訳、167)、「例外なしに商業を是認した。修道院でさえも、そこで生産された製品を取引した」、「しかし商業にはもちろん大きな留保条件が付けられた。なぜなら禁欲的な心的態度からは、商業は、所有と利益の満足を前提するものと嫌疑がかけられ、愛の心的態度からは、商業は、ある人から取って他の人に与え、他人の財産によって自分自身を富ませようとするものと疑われた。大規模経営と結びついた独占、買い占め、貸付け、金利の取り立てへの傾向、景気変動の予測とそれの利用、不当利益と不誠実さへの種々なる傾向が、商業に対する道徳的な疑惑を増大せしめた。それ故、商業は、神学理論では、農業や手工業より劣る営利形式であり、価格は、調達価格に、生活に必要な利益を付加することが許される、といった予防策が講じられた。」（168）

５．キリスト教は日常性（経済）と超越するだけでなく、日常性に内在する。

・牧者としての神。神は不可視的霊的超越的ではあるが、日常の様々な領域で、象徴的な形態において、経験される。→　神自体と神表象の区別。

・イエスの譬えにおける「経済」モチーフ　→　「ぶどう園の労働者」の譬え
（マタイ20. 1−16）
「タラントン」の譬え（25.14-30）
天の国とは？
これをいかに解するか。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」「宮清め」
政教分離？

６．古代イスラエル経済＝遊牧という図式とその限界
ヘーゲルから和辻の風土論や現在にまで及ぶ図式

・Theodore Hiebert, *The Yahwist's Landscape. Nature and Religion in Early Israel*, Oxford University Press, 1996.

Rethinking the Problem, Reexamining Presuppositions（15-22）

History versus nature, The desert versus the sown

Hegel was heir to a long tradition in Western philosophy and theology

a view of the history of religion as a dialectical process passing three stages

（1）the religion of nature, in which God or Spirit is identified directly with nature;

（2）the religion of spiritual individuality, in which Spirit is distinguished from nature;

（3）absolute or revealed religion in which the Spirit-Nature dichotomy i s overcome in the incarnation of Christ.（16）

・「若きヘーゲル」の「アブラハム」

『キリスト教の精神とその運命』（Der Geist des Christtentums und sein Schicksal ）

藤田正勝『若きヘーゲル』創文社。

（３）聖書が描く日常性の多様性

７. 聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。富者批判という基調と祝福としての富理解まで。

↓

キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

８．富者批判：

⑴預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」（イザヤ 10.1-2）

⑵黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」（エチオピア語エノク 94.8）

⑶イエスの富者批判。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」

「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」（ルカ 6:20-25）

⑷マリアの讃歌。

「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」（ルカ 1:47-55）

⑸原始キリスト教会と愛の共産主義（財産の共有）。

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」（使徒言行録 4:32）

９．物質的な豊かさは神の祝福。→　因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

⑴「主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」（創世記 24.35）

⑵「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、 籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で撃ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。」（申命記 28.1-8）

⑶「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六

千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。」（ヨブ 42.12-17）

(4)「主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」（箴言 22.4）

(5)「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」（コヘレト 5.18）

10.「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1) 不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2) 富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」（「富」『平和事典』教文館、刊行予定）

11. 問題

・聖書解釈から何が言えるか

・「経済―政治―社会」の相互連関の理論モデル

・近代の問題状況の明確化

　アーレントの言う「社会」の問題

　資本主義経済の哲学的前提とキリスト教（自然神学）

　経済理論としての社会主義あるいはアナーキズム